幼児における因果的推論と語り

山　本　政　人

かつて幼児は自らの行為を意識化できないと考えられていた。Piagetは数多くの幼児の語りから彼独自の発達理論を構築したが、それらの語りは自然現象や自然物についてのものであり、幼児の対象認識を表すものであった。Piagetの研究以来、幼児の対象認識に関する研究は盛んに行われたが、自己認識に関する研究は活発に行われたとはいい難い。幼児が自らの行為を意識化できないということがその理由の一つであろうかと思われるが、それ以前に幼児が自らを語る能力を持っているかどうかが問題となるに違いない。

幼児の物語る能力の発達に関しては、内田の一連の研究がある。内田はまず物語産出に用いられる知識や方略といった認知的条件に着目し、幼児がそれらを早くから持っており、幼児の物語展開の構造やタイプが成人のそれと類似性を持つことを見出した（1982)。さらに内田は、幼児期の象徴機能や可逆的操作の発達により、物語産出も質的発展を遂げることを見出した（1985)。とりわけ5歳後半から、①行動のプランを持ち始め、②プランに照らして自分の行動をモニターし、③因果的枠組みが整い、結果から原因を推論できるようになるという変化が起きる。これらが幼児の物語る能力に飛躍的な発達をもたらすことが確かめられた（1996)。

5歳後半における物語産出の完成を内田はディスコースの成立と呼んだが、これは想像力の発達という観点からもとらえられている（1994)。内

田は幼児に課題を呈示し、それに対する幼児の反応からディスコースの発達をとらえたが、このような実験的方法によるだけでなく、幼児の自発的な物語産出にも注目し、それが想像力の発達とつながっていることを指摘した。そして物語ること、すなわちディスコースの発達は、言語や想像力の発達につれて進んでいくが、それを内田はBrunerらの言説に倣って、人が生きていく過程で出会う事物や事象を「意味あるものとする」営みであるととらえている。

ところで、この物語ることが、人が出会う事物や事象を意味づける営みであるという見解は、最近のナラティヴアプローチの思想の根幹を成すものである。Bruner（1986）は人間の思考様式に論理実証モードとナラティヴモードがあり、後者こそ個人が経験を意味づける方法であり、個人は出来事間に特定の結びつきを与えることによって経験を理解するとした。Brunerは二つのモードの違いを強調したが、論理実証モードも物語モードもともに個人が自己の経験を理解する手段であり、その理解の仕方も基本的に同じであって、単にモードの違いであるとも考えられる。そして二つのモードに共通する理解の仕方とは、事象の因果関係的把握にほかならないのではないかと思われる。本田（1982）が指摘したように、我々は事象を「物語」として、すなわち因果関係的に一貫性を持った意味のまとまりにおいて把握する以外に事象を受け止めるすべを知らない。さらに本田は子どもという存在が、そのような因果的枠組みに収まるものではないことを指摘するが、そのことはさておき、本田が指摘したように、我々はありとあらゆる出来事に因果関係を見出そうとし、それが見出せればその出来事を理解できたと認め、安心することができる。しかしそれが見出せない場合には、強い不安を感じるとともに、その出来事に対して強い反発を感じる。

事象を物語として理解するということが、事象間に因果関係を見出すことと同義であるか、そうではないとしても、少なくとも両者の間に密接な関係があるということは、内田の研究結果からも容易に推測できる。すな

わち幼児期の因果関係の認識の発達がディスコース成立の必要条件であるとすれば、物語る力を獲得することは、物語の中に因果関係を見出す力を持っていることを意味する。内田（1985）によれば、5歳後半から事象の因果的統合が可能になると同時に、結果を先に述べてから原因を述べるという原因→結果の順序を逆転させた表現を使うことも可能になる。この時期から事象間の因果関係を理解し始めるとともに、因果関係によって構成された物語を産出することができるようになると考えられる。絵本、紙芝居、テレビ番組など、子どもたちは数多くの物語に日々親しんでいる。そして年齢が上がるにつれ、子どもたちは因果関係を軸に構成された物語絵本やドラマを好むようになると思われる。内田の研究結果はこのことと関連している。発達的には、内田のとらえた因果的統合の発達をベースとして、Bruner や本田の言う事象の物語的理解が成立すると考えられる。そして物語的理解の発達には、幼児期の物語に親しむ経験が少なからず影響していると考えられる。

一方、ナラティヴアプローチの最大の関心事である自己の経験を語り、そのことで自己の経験を意味づけるということは幼児期から可能なのか。可能であるとすればどのように発達するのか。この問題について検討することが本研究の目的である。成人のナラティヴに関する研究は、野村（2002）による高齢者の研究、徳田（2004）による成人女性の研究など、最近盛んになりつつあるが、子どものナラティヴの可能性についてはこれまで検討されていない。ナラティヴを一定の構造をもつ物語であると考えると無理からぬところではある。

本研究では、まず幼児における因果関係の推論の発達について調べる。本研究で用いた課題は、他者の心理過程を推論させるものである。すなわち、ある出来事によって他者の心理にある変化が生じたという場面を幼児に呈示し、どのような出来事が変化を生じさせたのかを推測させる。これは他者の心理に関する推論であり、「心の理論」の発達とも関係する。「心の理論」の発達については、主に誤信念課題を用いて研究が行われてきた。

それらの研究では、幼児が他者の誤信念を理解できるのは4歳以降であることが示された。本研究では誤信念課題のような複雑な課題ではなく、子どもが泣いている絵を呈示し、なぜ泣いているのかを問う単純な課題を用いた。これは厳密な意味での「心の理論」を調べるものではなく、やはり内田が用いた因果的統合の発達を測る課題に近い。この課題を用いて、4歳以降、他者の心理過程に関する推論が可能かどうかを確かめる。

本研究のもう一つの目的は、他者の心理過程に関する推論が自分の経験を語ることと関係しているかどうかを探ることである。幼児の場合、自己を語ると言っても、それはナラティヴアプローチが扱う人生の物語とは異なるが、幼児が自らの経験についてどのような語りを行うかを探り、他者の心理過程の推論との関係を明らかにしたい。内田の先行研究から、因果的統合は5歳頃から顕著な発達が見られると思われるが、同時に他者の心理過程に関する推論にも発達が見られると思われる。同時期に自分の経験について語ることにおいても発達が見られるかどうかを検討する。すなわち、他者の心理過程について推論をすることと自己の経験を語ることとは、同時並行的に発達するのか、それとも一方が先に発達し、もう一方はその後を追うのかを確認する。幼児の自分の経験についての語りは、「どのようなときに泣くか」を問うことによって引き出そうとした。これは心理過程推論の課題で子どもが泣いている絵を呈示したことに関連した質問をするという形をとることができることと、「泣く」という行為が幼児にとって日常的な経験であるためである。「泣く」ことについて問うことにより、幼児の自己に関する語りを引き出せるのではないかと考えた。

方　法

対象児

埼玉県内の複数の公立保育園に在籍していた幼児82名。調査は2007年2月と7月に行った。4歳児（4歳5ヶ月〜4歳11ヶ月、平均4歳8ヶ月）

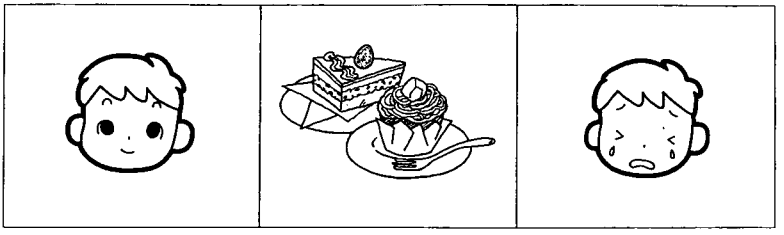

Fig. 1　呈示図版

22名、5歳児（5歳0ヶ月～5歳11ヶ月、平均5歳3ヶ月）31名、6歳児（6歳0ヶ月～6歳9ヵ月、平均6歳3ヶ月）29名。

手続き

保育園の1室を借り、そこで対象児一人ずつにインタヴューを行った。インタヴューはボイスレコーダーに録音した。

まず対象児に氏名、年齢を聞き、次に新版K式発達検査の了解Ⅰ（①お腹がすいたときにはどうしますか。②眠たいときにはどうしますか。③寒いときにはどうしますかの3問）の課題を練習課題として実施した。

その後、「これからお話の絵を見せるから見てね」と教示し、図版（成美堂出版編『すぐに使えるイラスト・カット大事典』2005年より作成）を示しながら短いストーリーを聞かせた。「（男児には男児の、女児には女児の顔の図版を示しながら）たけしくん（女児の場合はみほちゃん）は甘いものが大好きです。（ケーキの図版を示しながら）ある日、ママがケーキをたくさん買ってきました。たけしくんはケーキをたくさん食べました。次の日、（子どもが泣いている図版を示しながら）たけしくんは泣いてしまいました」というストーリーを聞かせた後、「たけしくん（女児の場合はみほちゃん）はどうして泣いてしまったのでしょう」と質問した。

呈示する図版は、男児または女児の普段の顔、媒介物、男児または女児の泣き顔の3枚で1組とした（Fig. 1）。媒介物はケーキ、砂場で遊んでいるところ、玩具、テレビの4つで、玩具は対象児が男児の場合はラジコンカー、女児の場合は人形とした。媒介物を変えながら、同様の質問を4

回行った。順序は①ケーキ、②砂場で遊んでいるところ、③玩具、④テレビの順で行った。なお、この課題を推論課題と呼ぶことにする。

ケーキ以外の媒介物の教示は以下の通りである。

砂場で遊んでいるところ：（子どもの顔の図版を示しながら）たけしくん（女児の場合はみほちゃん）は砂場で遊ぶのが大好きです。（砂場で遊んでいる図版を示しながら）たけしくんはお友だちと砂場で遊んでいました。しばらくして（子どもが泣いている図版を示しながら）たけしくんは泣いてしまいました。たけしくんはどうして泣いてしまったのでしょう。

玩具：（子どもの顔の図版を示しながら）たけしくん（女児の場合はみほちゃん）は誕生日に（玩具の図版を示しながら）プレゼントを買ってもらいました。たけしくんはとても喜びました。次の日、（子どもが泣いている図版を示しながら）たけしくんは泣いてしまいました。たけしくんはどうして泣いてしまったのでしょう。

テレビ：（子どもの顔の図版を示しながら）たけしくん（女児の場合はみほちゃん）はテレビを見るのが大好きです。ある日、（テレビの図版を示しながら）たけしくんはおうちでテレビを見ていました。しばらくして（子どもが泣いている図版を示しながら）たけしくんは泣いてしまいました。たけしくんはどうして泣いてしまったのでしょう。

対象児の回答の後、さらに「○○（対象児の名前）くん（女児は○○ちゃん）は泣くことがありますか？」と経験の有無を尋ね、対象児が「ある」と答えた場合、さらに「○○くん（女児は○○ちゃん）はどんなときに泣きますか？」と質問した。対象児の回答の後、対象児の回答（例「歯が痛いとき」）に即して「どうして泣いちゃうのかな？」（例「歯が痛いとき、どうして泣いちゃうのかな？」）とさらに理由を問うた。回答があった場合、「ほかにどんなときに泣きますか？」と尋ね、さらに理由を問うた。再度回答が得られた場合、もう一度同じ質問を行った。なお、この課題を産出課題と呼ぶことにする。

Table 1　各変数の平均値

	推論得点	産出数	理由数	了解正答数
4歳児	3.32	0.77	0.73	2.14
5歳児	4.71	1.55	1.32	2.29
6歳児	6.41	2.03	1.69	2.34
全　体	4.94	1.51	1.29	2.27

推論課題において、子どもの反応を次のような基準で得点化した。図版の子どもが泣いた原因として妥当と思われる理由を指摘した場合は2点（ケーキ図版の例：虫歯になった、歯が痛くなった、お腹が痛くなった等）。原因と考えることもできるが、泣く理由としては直接的ではないか、不十分と思われる場合は1点（ケーキ図版の例：ケーキがなくなった、歯を磨かなかった等）。無関係と思われる理由（ケーキ図版の例：お腹がすいた、ママがいない等）、わからない、無回答は0点とした。図版4枚で合計点は0〜8点となった。

産出課題においては、どんなときに泣くかをいくつ答えたかを産出数とした（1名につき最大3個）。また、泣く理由を答え、それが妥当なものであった場合、理由数（1名につき最大3個）とした。

結　果

各年齢における推論課題の得点、産出数、理由数の平均値はTable 1の通りであった。推論課題の得点、産出数、理由数について、三つの年齢群間で差があるかどうかを見るために一元配置分散分析を行った。その結果、いずれの変数においても有意差が見られた（推論課題の得点：$F=10.56$, $p<.001$；産出数：$F=10.59$, $p<.001$；理由数：$F=5.51$, $p<.01$）。多重比較を行ったところ、推論課題の得点は4歳児と6歳児の間（$p<.01$）と5歳児と6歳児の間（$p<.05$）、産出数は4歳児と5歳児の間（$p<.05$）と4歳児と6歳児の間（$p<.01$）、理由数は4歳児と6歳児の間

Table 2　産出者と非産出者の数

	産出者	非産出者
4歳児	11	11
5歳児	26	5
6歳児	28	1

Table 3　産出の内容（生起数）

	身体的苦痛	トラブル	怒られたから	その他
4歳児	2	4	6	5
5歳児	8	18	12	10
6歳児	22	13	13	11

（$p<.01$）に有意差が見られた。なお、練習課題である了解課題についても、年齢群間で正答数に差があるかどうかを見るために分散分析を行ったが、有意差は見られなかった。

産出については、泣くことがあると答え、それがどのようなときか一つでも答えた者（産出者）と泣くことはないと答えたか、あると答えながらどのようなときか答えられなかった者（非産出者）の人数を Table 2 に示した。

次に、産出課題における産出の内容について分析を行った。産出の内容とは「どんなときに泣きますか？」という問いに対する答えであるが、これには次のようなものがあった。まず身体的苦痛によるもので、「ころんだとき」、「歯が痛いとき」などである。次に子ども同士のトラブルによるものがあった。「いじわるされたとき」、「けんかしたとき」、「仲間に入れてくれないとき」などである。そして親やきょうだいに「怒られたとき」という回答が多数あった。そのほかに、「鬼がきたとき」とか「こわい夢をみたとき」などのこわい経験、「お母さんと離れるとき」、「ママがいなくなったとき」といった親との分離などがあった。年齢別の全産出内容は Table 3 の通りであった。χ^2 検定を行ったところ、年齢群間で有意差は見られなかった（$\chi^2(6)=9.92$, n. s.）。

Table 4　泣く理由（生起数）

	痛いから	怖いから	その他	わからない・無回答
4歳児	4	5	7	1
5歳児	15	13	13	7
6歳児	25	6	18	10

泣く理由については、Table 4の通りであった。「痛いから」と「怖いから」がどの年齢でも多く見られた。その他としては「嫌だから」や「悲しいから」という感情、同語反復（「怒られたとき」に泣く理由として「怒られたから」など）などが見られた。

「どんなときに泣きますか？」という質問への答えとして、「怒られたとき」とか「ころんだとき」と端的に答えるだけでなく、やや長く語った子どもがいた。以下にそのプロトコルを示す。

4歳女児　怒られる話

ひか（自分のこと）ね　ころんだときは泣かないけど、パパに怒られたときは泣くかな。えっとね、片づけても、片づけしないとなくなっちゃうから。あとね、パパとママの大事なものとか、さわっちゃだめだから。

5歳男児　弟が生まれた話

うち弟生まれたから。赤ちゃん。男。たいが（自分のこと）、りゅうがが好きだからさ。うえはらりゅうが。りゅうががさわれないと泣くな。たいが、抱っこすると大満足になるんだ。今日さあ、抱っこしたから大満足。なんかさ、りゅうがをさわりたいってママいっちゃうからさ。ママとパパ、けんかしたことある。たいががトイレでうんちしてるとき、ママとパパがけんかした。

5歳男児　保育園を変わった話

ママがいなくなって、ママが前、保育園1回だけ入って、それで泣いてるから。あの保育園、前は○○保育園、その次△△でしょ、もう△△は楽しくないからやめて、ここで話し合いがあって、おもちゃで少し遊んで、園長先生が、みんなが寝てるとき、ちょっとだけカーテンを開けな

いで、俺ちっちゃいときから、ちょっと前は、その次はもう帰って、ちょっとだけ話して、家帰って、寝て、ごはんたべて、起きて遊んだからこわかった。

5歳女児　おもちゃを貸してくれない話

あのね、ゆいな（自分のこと）におもちゃとか貸してくれないとき。あの、貸して、あのね、あの、あのね、ゆいなが使いたくてみんなが取っちゃう。取ってやだから。

6歳女児　ママがいなくなる話

夢でこわいことあって、ママが死んじゃった夢とかみて泣いちゃう。あと、ママがねえ、遠くに行った夢とかみると泣いちゃう。ママがいなくなってさ、お金いっぱいためて次の日一緒に行けんのに、行けなくなっちゃったしさ。

6歳男児　きょうだいげんかの話

けんかで泣くときはある。お姉ちゃんと。んー、泣くとね。ぼくはね。最強になっちゃう。

6歳男児　泣かされる話

おうちではいつも泣いてる。お兄ちゃんに泣かされてんの。んーとね、こうき（自分のこと）はキリンのときね、いつもおばあちゃんち行くとね、鼻ぶんなぐられた。でもねえ、ライオンの、今俺はライオンで、ライオンでも泣かされる。

6歳男児　兄の話

お母さんに怒られたり、お兄ちゃんになぐられたりすると泣くけど、お兄ちゃんも別に泣くことある。（どうして泣いちゃうの？）やだから。痛いから。お兄ちゃんは学校でね、なみき君ていう子とね、えっとね、けんかしてヒーローみたいにバトルしてるみたいなんだから、強すぎる。

変数間の相関は、推論課題の得点と産出数では r＝.43、推論課題の得点と理由数では r＝.35、産出数と理由数では r＝.88 であった。いずれも1％水準で有意な相関であった。

Table 5　産出数と理由数の平均値

	産出数	理由数
推論高得点群（N＝53）	1.83	1.57
推論低得点群（N＝29）	0.93	0.79

また、推論課題の得点の全体の平均値が 4.94 であったため、5 点以上を高得点群、4 点以下を低得点群として、両群の産出数および理由数の平均値（Table 5）の差の検定を行った。産出数、理由数とも、高得点群の方が有意に高かった（産出数：$t=3.91$, $p<.01$；理由数：$t=3.27$, $p<.01$）。

考　察

推論課題においては、4 歳児と 5 歳児の間には有意差がなく、5 歳児と 6 歳児の間に有意差が見られた。6 歳児の平均得点は 6.41 であり、多くの 6 歳児が絵を見て子どもがなぜ泣いているかを正しく推論することができたことを示している。一方、4 歳児の平均得点は 3.32、5 歳児のそれは 4.71 で、5 歳児でも半分程度しか正しく推論できていないことがわかる。今回用いた課題は、「心の理論」研究で用いられる誤信念課題より単純で容易なものと思われたが、4 歳児、5 歳児にとってはそうではなかったようである。

これとは異なり、産出数は 4 歳児と 5 歳児の間で有意差が見られた。産出数の平均が 5 歳児は 1.55、6 歳児は 2.03 であるのに対し、4 歳児はわずか 0.77 であった。Table 2 からも 4 歳児は 5 歳児、6 歳児より産出者が明らかに少ないことがわかる。非産出者の中でも、「どんなときに泣きますか？」の前の「泣くことがありますか？」という質問に対し、はっきり「ない」と答えた子どもが、4 歳児では 22 名中 8 名、5 歳児では 31 名中 3 名いたが、6 歳児では 0 であった。4 歳児では 36.4% もの子どもが泣くことはないと答えたのであるが、4 歳児でこれだけの子どもが泣かないとい

うことは常識的に考えてあり得ない。泣くことがないのではなく、自分が泣く事態を想起することができず、「ない」と答えたのであろうと推測される。理由数は産出数の場合とは異なり、4歳児と5歳児の間、5歳児と6歳児の間で有意な差は見られなかった。また、産出数では明らかな差が見られたが、産出の内容には年齢差はなかった。「どんなときに泣きますか？」への答えはどの年齢でも類似しており、身体的苦痛、子どもとのトラブル、親やきょうだいに怒られたときの三つのケースが多数を占めた。泣く理由については、Table 3に示したように、「痛いから」、「怖いから」という理由が多数見られた。また、結果で示したように、やや長く語る子どもがおり、自分の泣いた経験に関連して家族とのかかわりについて語っていた。そこから子どもの家族へのさまざまな思いを汲み取ることができる。

他者の心理過程の推論に関しては、5歳から6歳にかけて変化が起きるというのが本研究の結果であった。これに対し、自分の経験を語ることに関しては4歳から5歳にかけて変化が起きるという結果が得られた。本研究の課題の特殊性を考慮しなければならないが、5歳で自分の経験を語ることが可能となり、6歳で他者の心理過程の推論が可能になるという結果となった。内田は因果的統合についても物語産出についても、5歳後半から本格的に可能となることを明らかにしたが、本研究の結果はこれと概ね一致するものの、産出についてはやや早く変化が見られた。これは本研究の課題の特殊性のためもあるが、そもそも本研究でとらえようとした産出が、内田の扱った物語産出とは異なるものであったことを指摘しておかなければならない。

内田がディスコースの成立とした物語産出は、「特定の時と場所の定まった「自分の」経験を報告する」ものではなく、「ある時、ある場所、ある人物の出来事として一般化された行為系列を語ろうとする」ものである(1996)。これに対し、本研究で引き出したのは、子ども自身の経験の報告である。本研究で引き出したのは、産出といっても内田のそれとは決定的

に異なり、個別具体的な経験の報告であり、これは内田が5歳後半から可能になるとした物語産出より達成時期が早いものであると考えられる。本研究の結果から、個人の経験を語れるようになるのは5歳前半からであり、4歳では語ることはもちろんであるが、まず経験を想起することがむずかしいと考えられる。「泣くことはありますか？」という質問に対して、「ない」と答える子どもが4歳では4割近くもいたということからもそのように推測できる。

5歳になると、質問に答えるだけでなく、それに関連して自分の経験を語る子どもが少数ではあるが存在した。多くは自分の家族にまつわるエピソードで、どんなときに泣くかという質問に対して出てきたものであるため、トラブルのエピソードが多かったが、泣いた経験に関連して想起されたものに違いない。幼児のエピソード報告に関しては上原（1998）の研究がある。上原によれば、2、3歳から、エピソード報告が見られるが、これは日常生活場面における自発的報告であり、本研究の実験的場面での報告とは異なる。本研究においては、4歳児ではエピソードはほとんど出てこなかった。また、数が少ないので確かなことはいえないが、5歳児の語ったエピソードは「泣く」ことから離れたいわば身の上話になっていたのに対し、6歳児のエピソードは泣いた経験をより詳しく語ったものであった。

このような4歳児と5歳児および6歳児との違いが何に由来するものであるかを考える上で、練習課題として行った了解Ⅰ課題の結果が参考になると思われる。了解Ⅰは「もし～ならどうしますか？」という形の言語理解と表出の発達を測る発達検査の課題であるが、年齢群間で正答数に差はなかった。このことだけで判断するには無理があるが、4歳児と5歳児および6歳児との違いは、言語能力よりも経験を想起する能力にあるのではないかということが考えられる。内田は5歳後半から同時に扱える情報の量が増加するため、複数の機能が出現しかつ協働するようになるとしているが、4歳では扱える情報に限りがあり、自分の経験を想起し、さらにそれを語ることは困難であると考えられる。

内田（1985）は5歳後半から因果的統合において結果から原因を推論する「逆順方略」が使えるようになるとしたが、本研究においても推論課題の結果はそれに合致するものと思われる。平均得点から見て、4歳児、5歳児と6歳児では明らかな差があり、他者が泣いた原因を正しく推論することは6歳になって可能になるといえる。しかし自分が泣く理由を語ることになると、6歳児は5歳児と差がない。内田がいうように5歳後半から大きな変化があるとすると、5歳児と6歳児で差が見られたはずである。これも課題に問題があったと考えることができる。子どもは「どんなときに泣きますか？」と質問され、まずどんなときに泣くかを想起しそれを語る。次に「どうして泣いてしまうのかな？」と質問されるが、そのとき子どもは理由を推論するのではなく、自分が泣いたときのことをさらに想起し、泣いた理由を思い出そうとするのではあるまいか。産出課題において語られた泣く理由を見てみると、「痛いから」、「怖いから」という理由が大多数を占めた。これは推論によって出てきたというよりも、やはり自分の経験を想起し、自分が泣いた理由を思い出して答えたものと思われる。したがって、想起が困難な4歳児では当然理由も答えられず、5歳児では「痛いから」、「怖いから」という理由が出てきた。そして6歳児では「痛いから」が理由全体の半数以上を占めたが、これは痛くて泣いた経験が子どもにとって想起しやすいからであると同時に、6歳児は「身体へのダメージ→痛い→泣く」という明確なスクリプトをもっているのではないかと思われる。すなわち、5歳後半のディスコースの成立によって、子どもはこのようなスクリプトをもつようになっており、多くの6歳児が同じような回答をしたのではないかと思われる。

本研究で用いた産出課題は、自分の経験を想起し、それを言語化する能力を測るものであったと思われる。自分の経験を語ることは、因果的統合によって可能となる物語産出とは異なり、まず経験を想起することが必要であるが、これは4歳ではまだむずかしく、5歳から本格的に可能となると思われる。とはいえ、他者の心理過程を推論することと経験を想起し語

ることは無関係ではない。推論課題の得点と産出数および理由数の間には有意な相関が認められ、さらに推論課題の得点が高い群が低い群より産出数、理由数とも有意に多かったことから、他者の心理過程の推論の発達は経験を語ることと明らかに関係がある。他者の心理過程の推論を可能にする因果的統合の発達と、ディスコースの成立によって上述のようなスクリプトをもつなどの変化が起き、経験を語ることも容易になるのではないかと思われる。

幼児が自己の経験を語り、意味づけることができるかどうかについては、幼児は5歳から語ることはできるが、意味づけることについては本研究においては確認できなかった。子どもが質問への答えに付随して語ったエピソードは、子どもの生活の一部を垣間見せるものであったが、意味づけるような発言は見られなかった。語りを聞く大人が子どもの語りを解釈し、意味づけることはできる。たとえば、6歳女児が語った「ママがいなくなる話」は、実生活で母親が突然姿を消すか子どもと一緒にいられなくなるという出来事があり、そのことから子どもが寂しさ、心細さを感じ、そういう夢を見たのであろうと推測することができる。しかしこれはあくまで大人が作る物語であり、子どもが作った物語ではない。子どもにこのような物語を作ること、自己の経験を意味づけることができるのかどうか。それを確かめるための方法を探求することが必要である。

能智（2006）によれば、ナラティヴとは過去の出来事の単なる語りではない。ナラティヴについてはさまざまな見解があるが、構造をもつ語りであるという点では多くの見解は一致している。ナラティヴはいわゆる「起承転結」のような構造をもつ語りであり、特に「帰結」が重要であるとされている。「帰結」とは過去の出来事を振り返り、まとめる部分、すなわち意味づけに当たる部分であると思われる。今回得られた幼児の語りにはこの部分はもちろん、起承転結のような構造も見られなかった。自分が泣いた経験を語った5歳児、6歳児も、泣いた理由としては、「痛いから」、「怖いから」という直接的原因としての感情を挙げており、起承転結のよ

うな構造をもつ物語にはなっていなかった。ただ、「どんなときに泣きますか？」と問われて出てきた子どもの語りは、まぎれもなくその子にとって意味のある過去の経験であり、このような語りが将来ナラティヴへと発展していくものなのではあるまいか。

本研究では、他者の心理過程の推論の発達と子どもの語りの発達がどのように関係するかを明らかにしようとした。幼児が自分の経験を語ることは、因果的統合の完成やディスコースの成立より早く、5歳前半から可能になる。それはナラティヴというには未熟なものであるが、過去の経験を想起し、それを語ることの発達的意義は小さくないと思われる。

引用文献

Bruner, J. M.　1986　Actual minds, possible worlds. Cambridge, MA : Harvard University Press.

本田和子　1982　異文化としての子ども　紀伊國屋書店

野村晴夫　2002　高齢者の自己語りと自我同一性との関連―語りの構造的整合・一貫性に着目して―　教育心理学研究 , 50, 355-366.

能智正博　2006　“語り”と“ナラティヴ”のあいだ　能智正博（編）〈語り〉と出会う　ミネルヴァ書房

徳田治子　2004　ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から　発達心理学研究 , 15, 13-26.

内田伸子　1982　幼児はいかに物語を創るか？　教育心理学研究 , 30, 211-221.

内田伸子　1985　幼児における事象の因果的統合と産出　教育心理学研究 , 33, 124-134.

内田伸子　1994　想像力　講談社

内田伸子　1996　子どものディスコースの発達―物語産出の基礎過程　風間書房

上原　泉　1998　再認が可能になる時期とエピソード報告開始時間の関係―縦断的調査による事例報告―教育心理学研究 , 46, 271-279.

付　記

本研究にご協力いただきました川越市立神明町保育園、新宿保育園の先生方、園児のみなさまに心よりお礼申し上げます。

（心理学科　准教授）